

4 グランドキャニオン・ビジターセンター

- ・ 調査日 平成 29 年 11 月 12 日（日）
- ・ 調査先 グランドキャニオン・ビジターセンター
（アメリカ・アリゾナ州）
- ・ 説明者 パークレンジャー
ランス・ガンベル(Lance Gambrell)
TY. カルロベッツ(TY Karlovetz)



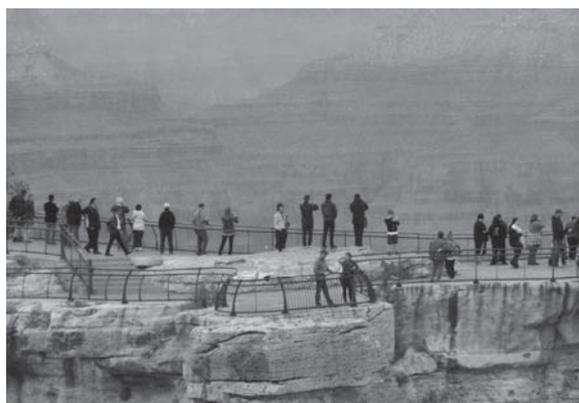
塚本 大

朝 4 時 30 分、宿泊先のホテルを出発し、バスで片道 5 時間（往復 10 時間以上、疲れました）、視察先のビジターセンターがあるグランドキャニオン国立公園に到着。現地のパークレンジャーから説明を受ける。

1 視察の目的

静岡県では、「世界遺産である富士山に係る包括的な保存管理の拠点」及び「富士山の自然、歴史・文化に加え周辺観光等の情報提供を行うなど、訪れる多くの人々のニーズに対応する拠点」として、静岡県富士山世界遺産センターの開館に向けた取り組みを進めている。

グランドキャニオン・ビジターセンターを視察することにより、世界遺産であるグランドキャニオン国立公園の保全管理の取り組み、ビジターセンターの管理運営方法等を調査し、今後の富士山の保存管理、富士山世界遺産センターの管理運営の参考にする。



展望台（マザーポイント）

2 概要

(1) アメリカ合衆国における国立公園の予算

アメリカ合衆国の国立公園の予算は国からのもので、国立公園、史跡や記念建造物等を含むアメリカの公有地417箇所に使われている。

トランプ政権になり、国立公園局の2018年度の予算は、戦後最大と言われるほど減る見込みである。内容としては、90%の施設で人員の削減や、絶滅危惧種であるグレイ狼等の保存プログラム等に使える予算が減ると言われている。ただ一部では、大掛かりな建設プロジェクトの予算が組み込まれているようで、その中にグランドキャニオンの水を供給するパイプラインに関わるものが入っている。説明してくれたパークレンジャーが、一番費用がかかるのは水の供給とメンテナンスだと話していた。

グランドキャニオンを含む国立公園局は、来年からピーク時（夏）の入場料を値上げする予定である。

(2) グランドキャニオン国立公園

グランドキャニオン国立公園は、アメリカ合衆国の最も古い国立公園の1つであり、アリゾナ州北西部に位置している。公園内には、コロラド川の峡谷であるグランドキャニオンがあり、これは大自然の驚異の1つとされている。

グランドキャニオンは、コロラド高原がコロラド川の浸食作用によって削り出された地形である。先カンブリア時代からペルム紀までの地層の重なりを目の当たりにでき、地球の歴史的価値を秘めている。

グランドキャニオン国立公園は、1979年に世界遺産に登録された。



パーク内の案内看板

3 ビジターセンター

グランドキャニオン国立公園は、コロラド川によって北と南に分かれる。ビジターセンターは、南側の公園に2箇所、北側の公園に1箇所あるが、

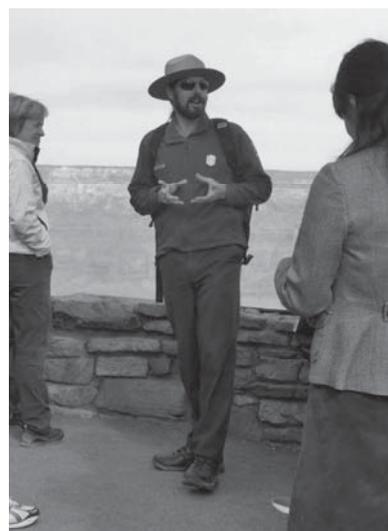
北側の公園は5月中旬から10月中旬までしか入れない為（この期間以外は入園できない為、北側のビジターセンターも休館）、今回の視察では南側の2箇所のビジターセンターと公園の外にある民間経営のビジターセンター1箇所を視察した。

(1) 公園の中のビジターセンター

公園内のビジターセンターは、グランドキャニオン国立公園の情報発信の拠点であり、国が運営している。

施設内にはグランドキャニオンの全体像がわかるジオラマや映画館、グランドキャニオンの地層の変化等からわかる地球の歴史を紹介するコーナー、グランドキャニオンの探検に使われた船の展示等がある。施設は数名の職員で運営されており、パークレンジャーも常駐している。

観光客は、パークレンジャーに公園内を案内してもらい、説明を受けることができる。パークレンジャーは、それぞれ専門分野が異なるため、観光客への説明内容は異なるが、グランドキャニオンの環境や歴史などを観光客に伝え、知ってもらうことにより、グランドキャニオンの環境保全に結び付けている（パークレンジャーは、グランドキャニオンの環境保全を図るために、観光客を教育する役割を果たしている）。



説明するパークレンジャー



南側パークの2つのビジターセンター

(2) 公園の外のビジターセンター

公園の外のビジターセンターは、ナショナル・ジオグラフィック協会が運営していて、各種地図、パンフレット、見どころをまとめた資料を無料で配布している。施設内には、ジオラマやグランドキャニオンの大自然を

紹介する450人収容のIMAXシアターがあり、撮影で使用された小型の船、映画の写真が展示されたギャラリー、フードコートやナショナル・ジオグラフィック協会のグッズをそろえたギフトショップが併設されていて、食事や休憩もできる。



ランス・キャンベル氏（左写真 左端）、T.Y. カルロベッツ氏（右写真 中央）の説明をメモする筆者

4 主な質疑応答

（質問）公園内のビジターセンターは、国立公園を初めて訪れる人を対象としているのか、それともリピーターを対象としているのか。

（回答）国立公園を初めて訪れる人を対象にしている。

（質問）グランドキャニオン国立公園にはパークレンジャーは何人いるのか。

（回答）50人位である。3つのビジターセンターの他に公園内の9箇所に駐在している。

（質問）今回の視察で、我々はパークレンジャーに公園内を案内・解説してもらったが、パークレンジャーに案内・解説してもらうのは有料か無料か。また、パークレンジャーによるガイドは完全事前予約制か、都合がつけば当日の急な依頼も可能なのか。

（回答）今回のような案内・解説は無料で、公園が設定したスケジュールで行われている（このスケジュールに合わせる為、我々は、朝4時30分にホテルを出発した）。パークレンジャーの数がギリギリで運営しているので、急に依頼をするのはかなり難しいと思う。この他に、公園のパートナーであるGrand Canyon Association (NPO団体)が行っているツアーは有料でやっている。

(質問) 今回の視察で、国立公園の外にあるビジターセンターとして、ナショナル・ジオグラフィック協会が運営するビジターセンターを視察したが、国立公園の外には他にも民間のビジターセンターはあるのか。

(回答) わからない。今回の視察で、ナショナル・ジオグラフィック協会が運営するビジターセンターも視察したいとの依頼があったので案内したが、他の民間のビジターセンターの存在までは把握していない。

5 県政への反映

(1) 富士山の保存管理

グランドキャニオン国立公園では、世界遺産としての保全管理の取り組みの1つとして、(公園内の)ビジターセンターにパークレンジャーを常駐させ、観光客に対してグランドキャニオンの歴史や地質学的な価値を伝える(教育する)ことにより、グランドキャニオンを保全管理していくことの重要性を観光客に理解させている。



ビジターセンターを視察する団員

富士山においても、富士山世界遺産センター内での情報発信だけでなく、富士山の登山客に対して、直接、現場で、富士山の保存管理の重要性を伝える(教育する)ことが必要であると感じた。

(2) 富士山世界遺産センターの管理運営

グランドキャニオン国立公園内のビジターセンターは、国立公園を初めて訪れる観光客をターゲットにしている。そして、国立公園内にあるため、「ビジターセンター自体に多くの観光客に来てもらおう」というよりも、「国立公園に来た人の中で、グランドキャニオンに関する情報の欲しい方は寄ってください」という施設だと感じた。そのため、施設自体は大変質素な造りである。

一方、富士山世界遺産センターは、多くの来館者を期待しており、施設の特徴として、逆さ富士をデザインし、それなりの費用をかけている。つまり、施設自体に人に来てもらう努力をしなければならない。

グランドキャニオン国立公園内のビジターセンターには、飲食の出来る

場所はないが、公園内の他の施設として、レストランや宿泊施設・ギフトショップがあり、観光客が食事や休憩の出来る場所がある。

また、グランドキャニオン国立公園外のビジターセンターには、フードコートがあり、ギフトショップも公園内のビジターセンターより充実していて、施設内で観光客が十分に時間を費やすことが出来る。

一方、富士山世界遺産センターには、カフェ程度のスペースしかないと聞いている。施設自体に人を呼ばなければならない富士山世界遺産センターにおいては、飲食の出来る場所の確保等（施設内で無理なら施設外の飲食店等との連携）は必要ではないかと感じた。

6 まとめ

今回の視察で、世界遺産の保存管理の取り組みは、あらゆる機会をとらえて、様々な方法で行わなければならないと感じた。世界遺産に登録されて間もない富士山、そして、富士山が存在する静岡県においては、世界中にある世界遺産の保存管理の取り組み方法（先進事例）を学び、取り入れられるものは積極的に取り入れる姿勢が重要である。機会があれば、他の世界遺産の保存管理状況も視察し、富士山の保存管理に役立てたい。



TY・カルロベッツ氏を囲んで

5 ネバダ州ゲーミング管理局

- ・ 調査日 平成 29 年 11 月 13 日 (月)
- ・ 調査先 ネバダ州ゲーミング管理局
(アメリカ・ラスベガス)
- ・ 説明者 執行部次長
ジェイムズ・テラー (James Taylor)



野崎 正蔵

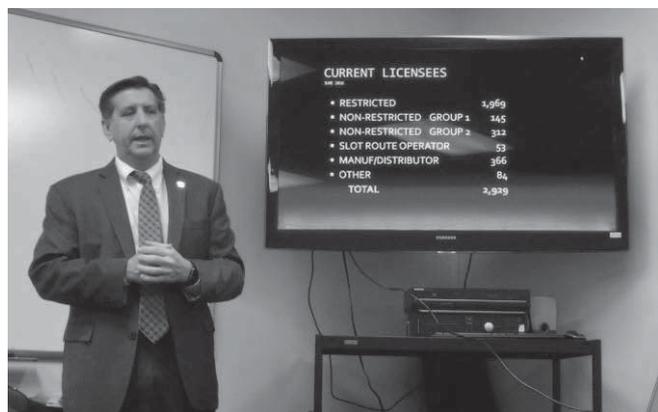
冒頭、静岡県は日本の真ん中に位置し富士山や日本平といった風光明媚な土地柄である、今後、その魅力を活かしてカジノ誘致等の議論もあり得ると考えることから、今回カジノに係る様々な事柄について勉強に来たとの天野団長の挨拶から始まった。

1 ラスベガスとカジノの歴史

砂漠の中のオアシスとして発見されたラスベガスが街として発展を遂げてきた歴史をひもとくと、1905年の鉄道の開通に伴い、水の供給地として駅が作られたこと、1931年にネバダ州がギャンブルを合法化したこと、バグジーの名で知られるマフィアのベンジャミン・シーゲルがつくったホテル「フラミンゴ」のオープンが転機としてあげられる。

しかし、当時はカジノを開くライセンスといったルールが確立しておらず、人気リゾートとして成功した1950年代には、フラミンゴやサンズなどホテル賭博の売り上げは大胆な手法で脱税やピンハネされ、約300億円が闇取り引きされていた。また、カジノ経営に関わる揉め事で殺人事件なども多発し社会問題となっていた。

こうした中、政府がマフィアに寛大であった時代もあったが、巨万の富を持つハワード・ヒューズが「デザート・イン」というホテルを買収したのをきっかけに、州政府は上場大企業も投資ができるようにし、1969年に「カジノ・ライセンスの取得は主要株主の審査だけで良い」という法改正をすることになる。



説明するジェイムズ・テラー氏

それにより、ハイアット、ヒルトン、ラマダ、ホリデー・イン、MGMなどが、莫大な資金をラスベガスに投資できる事となり、ラスベガスのカジノはマフィアの手から企業の手に移行していった。

説明者のジェイムズ・テラー氏の話によれば、マフィアの一掃には約25年の年月がかかったという。

2 ネバダ州政府とカジノ

ネバダ州は、1955年、合衆国で初めてカジノ経営を公認した州であり、州のしかるべき機関から免許を交付されれば、州内のどこでも自由にカジノを経営することができる。

ネバダ州では、カジノについてこんな認識を持っているようである。

- ・ゲーミング産業がネバダ州の経済及び州民の福祉にとって極めて重要なものとなっている。
- ・ゲーミング産業が安定的に順調に成長していくためには、ゲーミングが誠実に、かつ競争的に行われることが大切である。
- ・ゲーミング産業により社会規範の退廃や犯罪の増加に繋がらないように公衆の信頼を得ていることが必要である。
- ・公衆の信頼を確保していくためには、ゲーミング営業に関連する事項についての厳格な規制が必要である。
- ・厳格な規制を行い、安全と安心が確保され、一般公衆に開放され、そのアクセスが保証されていなければならない。



ジェイムズ・テラー氏の説明をメモする筆者

3 ネバダ州ゲーミング管理局について

(1) 組織の概要と役割について

ネバダ州は、ゲーミングポリシー委員会、ゲーミング委員会、ゲーミン

グ・コントロールボードが連携して、ゲーミング（カジノ）産業の監督・監視を行っている。ゲーミングポリシー委員会は、州知事・ゲーミング委員会、ゲーミング・コントロールボードの諮問機関としての役割を担っている。ゲーミング委員会及びゲーミング・コントロールボードは、州法及びゲーミング規則の制定・施行、ライセンス付与に係る審査等を行っている。

ゲーミング委員会及びゲーミング・コントロールボードの下には、総務局、監査局、法執行局、調査局、税・ライセンス局、技術局の5局が配置され、ライセンスの発行に係る調査やカジノ経営に係る調査、ゲーム機に関する検査や犯罪の取り締まり等の具体的な役割を担っている。

(2) カジノ事業とライセンスについて

ネバダ州では、カジノ事業に携わる法人・個人にライセンスの取得を義務付けている。ライセンスは、無制限のライセンスと制限があるライセンスの2種類があり、カジノ施設の規模やバー（飲食等）の設置などによって、6分野に種別されている。



テラー氏の説明に耳を傾ける団員

(3) カジノと税

ネバダ州では、カジノの売上高に対して税率（6.75%）が課税されるほか、ゲーム機の種類や台数によってライセンス料が徴収されることになっている。

※マカオの税率は39%であり、日本でも自らの税率を設定することが可能である。

4 主な質疑応答

（質問）ネバダ州では州議会においてギャンブル依存症などを支援する法律が出されたというが、具体的な内容は。

（回答）アメリカゲーミング協会では、1995年に「責任あるゲーミングのための企業行動憲章」が策定され、未成年者のギャンブル等の問題が摘発された場合には、事業者に罰金やライセンスの剥奪等の制裁が加えられるようになっている。

また、ゲーミング事業者よりカジノ収益の一部が拠出され、問題発生抑止のパンフレットの作成や、教育プログラムの作成、無料の

相談窓口の設置などギャンブル依存症対策に充てられている。

(質問) ギャンブル依存症の定義とは。

(回答) 難しい質問だが、簡単に説明すると、ギャンブルを楽しんでやる
ことができているか、ギャンブルをやるのが楽しめなくなったら
依存症といえるのでは。

5 まとめ

平成28年12月、統合型リゾート(IR)整備推進法案、通称「カジノ法案」が
成立した。長らくカジノを違法としてきた日本にカジノが誘致されるという
ことで動向が注目されていたこの法案だが、ギャンブル依存症や治安に対す
る懸念から反対の声も未だに多いのが現状である。

この法律の正式名称は「特定複合観光施設区域の整備の推進に関する法律」
で、IRとはカジノだけでなく、ホテルやショッピングモール、巨大な
MICE(会議場・展示場等ビジネス関連施設のこと)を含む複合観光施設を
指し、IRで国内外の観光客を呼び込み、雇用が生まれ、地域の活性化につな
がると期待もされている。

ただ、IR推進法はあくまで「推進法」であり、理念や方針、手続きといっ
た大枠を規定するプログラム法に過ぎず、IRの詳細な内容を規定した
IR実施法は制定されていない。当初は2020年の東京オリンピック・パラリン
ピックに合わせた制定を目標としていたが、識者の間では、2025年前後にな
るのではないかとされている。

また、ギャンブル依存の他には、「治安
悪化の懸念」、「マネーロンダリング(資
金洗浄)の場となる危険性」といった問題
もあり、こうした問題に対してどのような
対策をとっていくのかも課題となっている。

実施法については、「国民の理解を得ら
れる詳細な制度設計を行い、民間の投資や
参画を促すインセンティブも盛り込むべ
き」とも指摘されているように、今後地域
でも議論を深めていく必要性を感じた視察
であった。



筆者とジェイムズ・テラー氏



ジェイムズ・テラー氏を囲んで

6 ラスベガス・コンベンションセンター

- ・ 調査日 平成 29 年 11 月 13 日 (月)
- ・ 調査先 ラスベガス・コンベンションセンター
(アメリカ・ラスベガス)
- ・ 説明者 前ラスベガス市長
オスカー・グッドマン (Oscar Goodman)
シニアディレクター
パトリック・コイン (Patrick Coyne)
シニアマネージャー
デレク・ピノック (Derek Pinnock)
スペシャルイベント担当
リック・ノーガス (Rick Nogues)



鈴木 洋佑

天野団長の50年前にラスベガスを訪問した折の感想を交えた挨拶の後、前ラスベガス市長のオスカー・グッドマン氏及び秘書のサンディー・デニーズさんからの歓迎の言葉があり、世界一のエンターテインメントの市を目指しているという非常に前向きな姿勢を伺うことができた。

なお、この度の調査に当たり、IBI AmericaのCEOロイ・川口氏のご尽力に依り、非常に順調な経緯で調査が進行したことに感謝申し上げたい。

また、オスカー・グッドマン氏が我々の調査の為に協力し、調査当日の会場まで参加して挨拶までしていただいたことは、団員一同大いに感激をした次第である。

氏の自己紹介の中で、氏の本来の職業は犯罪専門の弁護士であり、市長を12年間務めたというバックグラウンドを持つ前市長の言葉を拝聴できたことは、調査団としても非常に意味深いものであった。



挨拶に立つオスカー・グッドマン氏とロイ・川口氏

1 ラスベガス・コンベンションセンター概要

ラスベガス・コンベンションセンターは、ラスベガス観光局が直接運営する複合展示施設である。施設の位置はホテルやカジノが建ち並ぶラスベガスの目抜き通りに30万㎡の敷地をもって整備されている。

ラスベガスは、かつてはマフィアが仕切る遊興の町であったが、現在はカジノのみにあらずスポーツ、ショー、コンベンションの充実した文化都市へと変貌を遂げている。依然として治安への不安は残るものの、人間の欲望や楽しみを満たす地域として世界の中でも存在感を持っている。

2 ラスベガス・コンベンションセンターの現況

ラスベガス観光局コンベンション部門のトップであるパトリック・コイン氏より、コンベンションセンターの現状と目指すところを伺った。

ラスベガス・コンベンションセンターは、面積30万㎡の敷地の中に18万5,800㎡の展示スペースと会議スペース2万3,200㎡を備え、展示スペースは可動式間仕切りで13に分かれている。

2016年実績で4,290万人の訪問を市として受け入れる中、コンベンション部門も大いに貢献している。国際的な家電見本市や世界最大の放送機器展覧会が毎年開催されるほか、スポーツイベントも多く行われるとのことであった。

会議室は144あり、用途に合わせて20人から7,500人までの収容が可能、駐車スペースも1万台以上有しておりレストラン、ロビー等共有スペースも充実しているとの説明であった。

パトリック氏は、ラスベガスを世界一訪問したくなる町であり、ビジネス、ゴルフ、ショー、レストラン、カジノ、スポーツ等人生を楽しむ所として充実させていきたいとの方向性を明確に示された。



説明するパトリック・コイン氏

3 ラスベガス・コンベンションセンター警備部門

次に、安全の為に活動する警備部門に関し、デレク・ピノック氏より報告を伺った。

ピノック氏によれば、警備員全員がしっかりとした制服を着用し、全員にピストルを携帯させており、センター内は徒歩、自転車、自動車を目的に応じて使い分けて行動している。

警備犬チーム（K9）を組織しており、視察当日は会場に犬を連れた警備員も同席した。警備員は全員が警察官・兵役の経験者であり、看護行為やAEDの取扱も可能な人材の集合体であるとの説明であった。

ただし、機械、人、犬等に依る警備も大切であるが、FBIやラスベガス市警察などの他の組織と連携して活動を行うことが最も重要かつ効果的であるとの報告がなされた。



説明するデレク・ピノック氏

4 ラスベガス市警察スペシャルイベント担当

最後に、ラスベガス市警察のスペシャルイベントのヘッドであるリック・ノーガス氏が締めくくりとして登場し、考え方を示された。

ノーガス氏によれば、ラスベガスは、例えば3日間通して行われる自動車レースやマラソン大会、カーニバル、コンベンション、大統領選挙等、数十万人が集まるイベントが数多く開催される街であり、それなりの経験と実力が必要である。

イベントに関与する全員が責任をもって目的に向かって取り組む姿勢が大事と締めくくられた。



説明するリック・ノーガス氏

5 質疑応答

（質問）施設の将来に向けて最も重視する視点は何か。

（回答）昨年度は世界のトップ250のビッグイベントのうち、57をこのラスベガス・コンベンションセンターで開催した。この数字を更に伸ばしたいと思っており、そのためにはスペースの拡張が最も重要であると認識している。

また、様々な種類のイベントが連携して実施できることも重要である。今現在で言えば6つの異なるイベントが同時に進行している。



質問する筆者



筆者と説明者3氏及びサンディー・デニーズさん

6 まとめ

以上、三者の異なる立場からの考え方を拝聴したが、全世界で行われているコンベンションの中でも最も優れたサービスを提供し、マネジメント面、危機管理体制、財政健全性、経済波及効果等、最も高い評価を得ているラスベガス・コンベンションセンターには、非常に多くの学ぶべき事柄があると思われた。

中でも、一番学ぶべき事は、コンベンションを必要とするパートナーとの有機的なつながりを継続するための最大限の努力であると認識した。



オスカー・グッドマン氏、パトリック・コイン氏、デレク・ピノック氏、リック・ノーガス氏を囲んで